MAPLE NEWS

2015年 Vol.74

ビッグサプライズです!!

ミッチー、天開が2015年度のLBCスポーツアワードナイトの候補に、サッカー部の優秀選手候補としてノミネートされました!一年目で、受賞候補に選ばれると言うのは、大変すごいことです! スポーツアワードナイトと言うのは、各スポーツの受賞式典になります。天開は所属していたサッカーチームの賞の受賞候補と言うことでノミネートされました。 アミカル・留学部門担当：ダン荒川

SOCCER

2015年度 LBCスポーツ アワードナイト

New Zealand

[受賞式の感想]

家に招待状がきた時はあまりよく理解してなかったけど、受賞式でサッカーのチームMVPに選ばれたことを知って嬉しかったです。選んでくれたコーチに感謝したいです。来年も選ばれるように頑張りたいと思います。 河森天開

「NZに飛んだ息子」

「天開を冒険に出そうと思うのよ。」3月初め、その一言で全ては始まった。天開が0才からお世話になった保育園の園長であり、6才からの10年間を学んだ「けやき学舎」の責任者、和子さんの英断だった。「行く!」「是非!」と子も親も即答。中旬に、和子さんとは十五年来の知己というCASの難波さんと面談。この道30年の難波さんは、この時既に、天開の滞在が長期に展開することを予見されていたようだ。2日後、2週間の予定で彼はNZへ旅立った。「もう楽しみで、全然緊張してない。」と嬉しそうに出国する後ろ姿を見て、「うん!これは長期になる!」と私も確信した。ほどなくして「LBCの1学期短期留学に挑戦」となり、5月中ばには「卒業目指して長期に変更」とあれよあれよの急展開。NZに着いてすぐ、LBC1日体験をさせてくださった、アミカルの弾さんのお蔭である。CASとアミカルの緻密な連携プレーに支えられ、ホストファミリーや友達にも恵まれて、天開は充実した毎日を送っているようだ。勉強はかなり大変だが、それでも全てが楽しいのだそうだ。10月下旬には、所属しているサッカーチームのMVP候補になったとか。弾さんによると、1年目で候補になるというのは大変凄いことなのだそうだ。この話を聞いて、「けやき学舎」を長年応援して下さっているSさんが言った。「まずは良かったね。彼は言わば白紙のノート状態。新しい事をどんどん書き込めるんだ。でも苦労はこれから。欠けているものも沢山あるからね。」一般的な日本の学校教育とは全く違う方法と道筋で学んできた天開。LBCの素晴らしくも厳しい環境で、どんな花を咲かせるのか?大いに苦労し、大いに楽しみ、白紙のノートを冒険譚で埋め尽くしてほしい。難波さん、弾さん、未熟な若者の後方支援、これからもよろしくお願い致します。

河森道子

ENGLISH JAPANESE STUDIES
CANADIAN ACADEMY SETAGAYA
4-20-13-213 NOZAWA SETAGAYA-KU, TOKYO, 154-0003, JAPAN TEL:03-5712-3670
BRANCH:ENGLAND,CANADA,NEWZEALAND,USA FAX:03-5712-3671

Michi recommends
響く本『会社の目的は利益じゃない』

横田英毅
YOKOTA HIDEKI
ネッツトヨタ南国株式会社 相談役

1943年生まれ。日本大学理工学部卒業後、カリフォルニアシティカレッジに留学。宇治電化学工業(株)(西山グループ系列)、四国車体工業(株)(同)を経て、1980年、トヨタビイスタ高知(株)(同・現ネッツトヨタ南国(株)発足と同時に副社長に就任。1987年、同社代表取締役社長。2007年、同社代表取締役会長。2010年、同社取締役相談役に就任して現在に至る。ネッツトヨタ南国は、全国のトヨタ販売会社300社中、12年連続顧客満足度No.1。

1917年より続く西山グループ(系列企業32社1財団法人、総資本金14億円、総資本600億円)の資本家の一員として、愛媛トヨタ自動車(株)、(株)西山合名、(株)トヨタレンタリース西四国、四国車体工業(株)などの代表取締役も務める。

ネッツトヨタ南国では、同社を設立して以来、経営における重要テーマと考えた「人材」の問題に取り組むべく、発足からの10年は自ら採用担当として数多くの学生と面談、現在の経営幹部の採用実務に携わった。以降、同社、同グループにおける人材問題のみならず、高知県産業界の人材にまつわる問題解決にあたるべく「土佐経済同友会(2000年〜2004年)「高知県パワーカンパニー会議」「高知県経営品質協議会(KON)」などの代表幹事、高知県教育委員会が主催する「土佐の教育改革」委員などを務めながら、「人づくり」に関するさまざまな提言を置きなっている。2009年より高知工科大学客員教授。

誰もやらない「いちばん大切なことを大切にする経営」とは

私は創業当時から、店の数ではなく店の質で勝負するという考え方を基本にしてきました。現在は、高度経済成長が終わり、バブル経済崩壊後の不況を経て、日本経済は長い低成長時代に入っています。

この様な時代には、新車をどんどん販売して利益を上げるスタイルの経済は成り立ちません。それなら、車を購入していただいたお客様に、質の高いアフタサービスを提供して満足してもらい、整備や点検などで利益を上げるビジネスモデルを築いたほうが合理的なのです。

「将来はどんな会社にしたいですか?」と聞かれた時、「問題解決だけをしている会社になりたい」というのが私の答えです。解決すべき問題は常に川上にあり、表面化する前の川上にある問題解決に常に時組むようにすれば、川下での問題対処をしないですむわけです。そのためには、社員一人ひとりが、いつも問題の種を探している姿勢を身につける必要があります。

本当に顧客満足を重視するのであれば、プロセスが出来ているかどうかを数値化するしくみをつくり、それを評価し、賞賛しなければならないと思います。

人は誰でも、人に喜んでもらうことに喜びを感じる気持ちをもっています。

女子サッカーなでしこジャパンが強かったのは、勝つという目標のためだけで戦ったからではありません。彼女たちには、ある「目的」がありました。それは、自分たちが勝つことによって東日本大震災の被災者を喜んでもらい、元気にしたいという目標でした。監督は試合の前に、東日本大震災の映像を見せたと言います。この利他のための目的を持つことでより強くなれ、自分を成長させることになることを知っています。

社員の幸福を本気に実現しようと思うのなら、お客様に喜んでもらえたかどうかが分かるしくみを作り、自分を成長させる機会が十分に組み込まれている形をつくるのです。これが経営者の、最も大事な仕事のひとつだと私は考えています。

わが社には部門を超えたプロジェクトチームがあり、社員は参画するプロジェクトを選ぶことができ自主性を育むため、課長以上の役職者は参加しません。最も大きなメリットは、「コミットメント効果」で、能動的な公約が生まれるということです。

このような経験を積み重ねることで、自主性や責任感、実行力、リーダーシップといった能力が総合的に養われるのです。参画と参加の違いは、参画には自主性がありますが、参加はただそこにいるだけということです。

働く人の幸せはやりがい以外にありません。それが高まるのは、自分が持っている人間力をフルに発揮したときです。

私は社員に対し「売上を伸ばせ」と言ったことはありません。もちろん私も経営者ですから、売り上げを伸ばしたくないわけではありません。ただ、意図していたのは、個人プレーで行って自動車セールスの仕事を、チームプレーに変えることでした。経営力とは、文字通り「経営する力」で、経営とは変えることとです。

農耕民族には互助精神がベースにあり、3・11で海外に紹介された助け合う精神では世界ナンバーワンだと思います。ですから、日本のマネジメントは、狩猟民族の様に個人プレイではなく、「横のつながり」を重視する日本人の特性をチームワークの基本に置くのです。

我が社は、ありがたいことに、チームワークがいい会社だといわれます。

会社がスタートして18年目、1998年9月25日。高知市は市内の四分の一が水没する被害に見舞われました。その朝、私が出社すると、既に社員たちは、あらかじめ県外に手配していた積載車を使って、水没した車の救助に奔走していました。だれが指示命令するわけでもないので、「いま何をしなければならないか」を共有し、真剣な表情で働く社員の姿がありました。明らかに全員が、お客様のほうを向いている光景を目の当たりにした私は「これがエンパワーか」と胸を熱くしたものです。

戦後70周年への思索

クリスマス休暇に歴史物を数冊よみ終えたが、歴史的な大事件の時、その人物が何歳になっていたかということが、その人物にとって重大な意味を持つことを確認できた気がする。

新しい統一国家を目指す運動へと駆り立てる決定的となったのは、嘉永６年（１８５３）６月のペリー来航。この事件を機として、支配階級上層部での政治的混乱は収拾不可能となった。この混乱のさなかから、日本国内に芽生えまたは伏在していた近代的統一国会と市民社会とを目指す動きは、それを政治的に実現する方向を掴んでいく。その動きのなかで中心的な役割を担っていく人物群をみてみると、嘉永６年という時点での彼らの年齢との間に、密接な関係がある様に思われてならない。

薩摩の西郷隆盛―２７歳、大久保利通―２４歳、小松帯刀―１９歳。長州では吉田松陰が大久保と同じ２４歳、木戸孝充―２１歳。高杉晋作―１５歳、伊藤博文―１３歳。土佐では坂本龍馬―１９歳、後藤象二郎―１６歳、板垣退助―１７歳。倒幕派公卿では、育ちのよさと一途さで精神的シンボルとなった三条実美が１７歳、姉小路公知が１５歳。老獪で知られる岩倉具視でさえ１９歳である。

これだけ見ても倒幕・維新の政治行動の中心となった面々は、ペリー来航の時には１０代から２０代だった事実である。倒したメンバーばかりではない。倒された側の代表である将軍徳川慶喜（当時は一橋慶喜）も１７歳である。

3.11東日本大震災の活動を通じて知り合った緑の惑星プロジェクトのメンバーが、昨年、沖縄の慰霊祭に参加しそこに流れていたさとうきび畑の歌を、戦後７０周年には沖縄出身の歌手にウチナーグチ（沖縄の言葉）で歌わせたいと言い出した。紆余曲折を経て、遂に１２月７日、ハワイ大学で平和の祈りコンサートとして実現。

花ゆうしゃぎゆん ＊-＊-＊ -＊-＊-＊ -＊ 花を捧げます
人（ふいとう）知らぬ魂 ＊ -＊-＊-＊ -＊ 人知れず亡くなられた多くの人の魂に
戦（いくさ）ねらぬ世（ゆ）ゆ ＊-＊-＊ -＊ 戦争のない世を
肝（ちむ）に願て（にがてい）＊-＊-＊ -＊ 心から願って

これは１５歳で終戦を体験された天皇のウチナーグチで詠まれた歌。沖縄では昭和天皇に対して批判は強いが、沖縄に頻繁に足を運び戦没者を慰霊している今の天皇に対しては、違った感情を持っている。

「石ぐらい投げられてもいい。そうしたことに恐れず、県民のなかに入って行きたい」と言い残し、当時４１歳だった皇太子様は美智子妃と初めて沖縄を訪問され、ひめゆりの塔事件が起きた。実行犯は皇太子ご夫妻に火炎瓶で傷つける目的ではなく、昭和天皇や日本政府の戦争責任を問うことが目的であった、と著書に書いている。

「私は、いまも終戦後のある日、ラジオを通し、A級戦犯に対する判決の言い渡しを聞いたときの強い恐怖を忘れることができません。まだ中学生で、戦争から敗戦にいたる事情や経緯につき、知るところは少なく、したがってそのときの感情は、戦犯個人個人への憎しみなどあろうはずはなく、おそらくは国と国民という、個人を超えたところのものに責任を負う立場があることに対する、身の震うような恐れであったのだと思います]

何故、美智子皇后が傘寿の誕生日に、この様な文章を出されたのか不可解だった。しかし、上記の緑の惑星プロジェクトに関わるようになり、改めて沖縄関係の学びをするうちに、恥ずかしながら、終戦の1945年、中学生だった皇太子の１５歳の誕生日・１２月２３日にA級戦犯が処刑され、皇后が一歳下の中学生だったことを知るに至った。

今回の歴史物の読書で、留学を軸にした管理教育に反発する感性派の実践の下敷きにしてきた、ヒトの教育の会の啓発運動・心の成長生理の確認にも繋がった。

３歳までの感性の目覚め、続く１０歳までの感性の仕上げの聖域を守り、ファイナル・ステージの２０歳までの「社会的活動」の準備サイクルに目覚める、クールな母親の増えることを祈念して。